

---

# 大伴の名の下に！

霜雪院竹夫

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

大伴の名の下に！

### 【Nコード】

N9620Z

### 【作者名】

霜雪院竹夫

### 【あらすじ】

注：この物語は受験の鬱憤を晴らすために推敲されております。十五歳の品川敬嬢は、日本生まれ、韓国育ち。日本の何処の『衛府市』に住んでいた彼は、小三の時以来の帰郷を果たすことに。

ところが、そこに向かうはずが、衛府行き駅のホームに、春から通うはずの『衛府東高校』の制服を着た美少女がいて……？  
「敬嬢……さんですか」「いや、先輩なんでしょ？敬語は無いですよね」「……っ」

地の字が足りない作者が送る、やけに背の低い少女・大伴絢佐と

その仲間達が繰り広げるドタバタコメディ！

第? : ?

向かい側から荒い息が聞こえて俺は窓から視線を少女に向けた。  
大伴絢佐。一つ上の先輩（自称としておこう）。衛府東高校に通  
っているらしい。高校生のわりには背が若干低い感じもしなくはな  
いが、ここは抑えて言わないでおく。

なんか怒るとやだし。

それから（漱石風）。

その少女　　大伴絢佐はぜーはーぜーはーしている。あまり  
・ ・ ・ かわいくない。

普通にしていれば人気がありそうな女の子だと思う。俺じゃなく  
てもきつと。流石に見惚れるような感じではないが、あの子可愛い  
なぐくらしいな雰囲気纏っているのは確かなことだ。

この短髪の黒い髪の女の子と手を繋いで走ったのを思い出し、思  
わず体が熱くなる。右手を無意識に眺めた。

うわー。本当に何やっちゃまったんだろ。今になって罪の重さを  
知った気がする。

・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・  
・ ・ ・ ・ ・

昔の遊びを思い出した。嫌な思い出だ。

あれは ・ ・ ・ 八年も前かなあ。たしか奈帆が ・ ・

「け　　品川さん。 ・ ・ ・ ・ ・ 品川さん。 ・ ・ ・ ・ ・  
品川さん」

「へ? ・ ・ ・ あ、絢佐さん。なんですか?」

「何って ・ ・ ・ なんか可笑しな顔してましたよ」

絢佐が笑う。初めて見て嬉しい気分 ・ ・ ・ ・ ・ が一瞬したの  
だが、頬が引きつっているのから考えていくと、やっぱり引かれて  
いる。うん。苦笑いという奴だ。

思わず引き締めた顔　　勿論引きつってはいない　　をして、

絢佐を見る。

.....

目を逸らされた。心なしか、顔を染めている。

無駄に傷ついた。俺の人格を否定された感じだ。ひどい。ひどすぎる。

こんなにも傷つくなんて。無視されただけで。変わった.....のかもしれない。

まもなく、衛府駅に到着します。後降車の準備を整え下さい。

車掌のアナウンス。濁った声。おじさんだった。

「あ、もう着くのか。短いような、長いような.....って感じだよなあ」

「.....そうですね。案外近いのかもしれませんが」

絢佐が反応してやけにしみじみと云った.....いや、言った。なんか昔の人みたいだった。まあ、無視されなかったことに関しては万歳だなあ。

駅に近づくにつれ、車両がゆったり減速。俺は固い鞆の違和感と自分の体温で温くなったスーツに不快感を覚えつつ立ち上がる。ブレーキが掛かってガツクリと慣性が働く。

衛府、衛府。今日は衛高線をご利用頂き真にありがとうございます。ございました。

だみの車掌ボイスと共に電車が停止し、ドアが開いた。

何人かの客を先に降ろさせて、俺・品川敬壊と大伴絢佐はホームのコンクリートに足を踏み出した。

新たな一歩。

無駄にかっこいい台詞に感じられた。

が、確実に俺の目の先にある。

衛府市。

本当の意味で俺の修羅場がある。

まず、杉原奈帆の母・文江さんにご挨拶。

そして、奈帆本人に。

更に、同居することになるであろう人たちに。

・・・疲れるなあ。この作業は。

こいつが就活か（違うけど）？ある意味で母・祐里子の言葉は間違っていないかったな。

「敬嬢さん。急がないんですか？文江さんが待ってますよ」

ひとり、ボくっとしていたらしい。数十メートル先に絢佐が半眼で言ってきた。

ああそうか、文江さんが・・・ん？

・・・んんん？

「絢佐さん、今なんつった？」

「え？なんのこと？」

目を逸らしている絢佐。

「今なんて言いました？」

「・・・急がな」

「その後」

「いのか・・・」

「もつと後」

「文江さんが待ってますと言いましたすみません」

絢佐がなんで高崎にいたのか。

なぜ 今まで突っ込まなかったけれど 俺のことを『け・

・品川さん』と言ったのか。

衛府東高校の制服を着ていて気がつかなかったけれど。

なんとなくパツと浮かんだ名前が『アヤ』だったことも。

大伴絢佐という名前がなんとなく、どことなく記憶の中に有った気がしていたのも。



だった。

対称的に並んだ二つの街の特徴について尋ねたはずなのに。全然違っていた大都市の様子に疑問を感じたはずなのに。

今でも、この意味は分からない。

私がそれでも高校に入るまでに成長できたのは、やはりあの声だろう。あの声が無かったとしたら、私の心は完全に塞がってしまっていた可能性はある。大有りだ。

「大伴さん。今日暇？」

男子生徒に声を掛けられたのは、五月の、若葉が目立つようになってきたころだったか。

校庭の桜の新緑を休み時間ただ眺めていた私の、初めての質問だった。

最初は、違う人なのだ、と思った。オオトモ、と読む名字の方が他にいたのかもしれない。大友さん・・・大伴さんはないとしても、もしかしたら『大殿』さんとか、そんな人がいたのか・・・と。

でも、違ったらしい。

「・・・大伴さん？訊いてる？」

「え？」

え、が私の第一声。クラスメイトへの、初の言葉。

「・・・あれ？聞こえてなかった？・・・あ、無理にとは言わないからさ・・・今日の放課後、時間あるかな・・・なんてさ」

その男子児童の周りには三人くらい男の子がいた。

「おい、敬。何無理やり誘ってたんだ」

大柄な子が言う。

「そっだけ品川」

瘦せた眼鏡の少年が続ける。青いシャツの三人目の子もコクコク頷く。

男子生徒・・・話掛けた子は「そうか」と呟いて元の位置に戻る

うとする。

「……そのとき……なんて言ったのか。肝心なことを忘れていた。もしかしたら、恥ずかしいあまり、自分の記憶から追い出したのかもしれないかった。」

とにかく、何か言った私に、四人は驚いて、それから、笑った。なぜかそのことは鮮明に記憶にある。

その日、私は今まで経験してこなかったようなことに出会った。それは仙人に突然遭遇したような感覚だった。

品川敬嬢。

初めて声を掛けてくれた『友達』。

そして、三人の男の子。

少年野球でキャッチャーをしていた体の大きい、佐々木陽くん。

佐々木くんとバッテリーを組む無口な、芳村武蔵くん。

眼鏡を掛けていてほっそりした体つきの、大江冬暮くん。

四人は衛府を案内してくれた。知らないような駄菓子屋。裏路地。最後には秘密基地まで。

「おい佐々木、そこに貯金箱無かったか？」

「あったぞ。……にしても敬、これ何円入ってるんだ？相当の量だぞ」

「ん。……この秘密基地の入場料を入れている」

「マジ！？俺金無いよ！」

「……それは武蔵の冗談だ」

四人はとっても仲が良い。飛ぶように会話ラッシュしていく。

くすつ。

思わず笑いが零れた。

そんな私に、静まる四人。

「………笑った」

誰かが言った。

「初めて笑いましたな」「笑った!?!」「………へえ」

一旦の沈黙。

沈黙。

沈黙。

そして。

………笑いの渦だった。

私のここでの、いや、人生初の、大笑いだった。正月の初笑いじゃないけれど。でも、そのくらい、私の衝撃的出来事。彼らは知らないだろう。私は今まで肉親にすら笑うことがほとんど無かったことを。

………品川敬嬢が韓国に行ったのはそれから一週間後。

私は知らなかった。ずっとここにいるのだろうと思っていた。

過去に何回振り返って考えただろう? ……本当に、私は自分勝手だった。自分を中心にして周りの様子を考えていただけだった。まるでコンパスで描いた半円。

実際は、大きい円で。しかも、複数あったのに。

自分の見た……いや、描いた五十%だけの世界を、全ての生活だ、と。

そう考えていた。

今さえ、そうだと思う。

品川敬嬢を騙した。きつと彼は気にしていないと言い張るだろうが、私はそうは思わない。それは建前だ。本音ではない。……  
・騙したのだ。

俺は、そんなことどうでも良い。  
そんなことで怒ったりしないよ。

そういうことを言われるのは嫌。絶対に。  
たとえ、神様が私を見捨てたとしても。

あの後。

私は徐々に衛府という環境に慣れていった。  
友達も増えた。

奈帆ちゃんや……みかんちゃん、つきみちゃん……………。

中学に行つて、そしてあつという間に受験。

あの三人の男子 佐々木くん、芳村くん、大江くんは、衛府  
東高校ではなくて、野球の強い衛府工業中央高校……通称『衛  
業』に行つた。三人は野球を高校でやっているだろう。

案外、衛府市は狭そうで広いのだ。

少なくとも……。

謝りたい。

あの、敬嬢さんに。

初めての、友達に。

あの、前を歩く、あの背中に。

第?…?(後書き)

第? ひとまず終了。たぶん

「ああ、なんだこのふざけた奴」  
と思ってくれたら幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9620z/>

---

大伴の名の下に！

2012年1月4日01時52分発行